

# 愛の実践者たち

— 自己中心性からの脱却 —

中 島 広 明

学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター客員研究員

## Individuals who put love into practice

— They found a way out from selfishness —

Nakajima Hiroaki

Vocational education center of research and development

**抄録：**新型コロナウイルス感染が全世界的な解決すべき課題となっている。新型コロナウイルス感染者からの自殺者まで出ている。現代にあっては、新型コロナウイルスはある種の「差別」の対象ともなっていると言えるのではないか。しかし、「差別」の対象は人種問題、ジェンダー、障がい者問題等、さまざまある。本稿では差別や、人の「自己中心性」を取り上げたうえで、差別、偏見、自己中心性から脱却するためのひとつの概念として、「愛」という概念を取り上げた。「愛」を実践した人物として、吉田松陰と三浦綾子の場合を検討した。そして、ヒューマンサービス業である教育職や福祉職が自分自身さえも「特別視」せず、「与えること」を実践することで、学生や利用者らも「与え手」になり得ること、そして両者が与え合う応答関係になり得ることの試論を試みた。

**キーワード：**愛、吉田松陰、三浦綾子、自己中心性、差別・偏見

### 1. 問題意識

中島（2020）は、吉田松陰について論じた。しかし、吉田松陰の実の弟、敏三郎については触れることができなかった。敏三郎は、現代で言えば、聴覚障がい者であった（海原・海原（2006））。敏三郎の「障がい」の快癒を、吉田松陰が加藤清正公廟に願いに行った（同上）ことから分かるように、松陰は弟思いの兄でもあり、松陰の思想形成にも敏三郎の存在が大きな役割を果たしているのではないかと文献を渉猟していた。

そこで、以下のようなことが心に浮かんだ。

吉田松陰が生きた幕末の時代は、ペリーの「黒船」

が来航し、日本は鎖国か、開国かを迫られていた〈外患内憂〉の時代であった。欧米列強の開国要求（利己心、あるいは西欧的正義の押しつけ）と、当時の封建的な日本社会との対立図式にあったのである（徳富（2015））。

翻って、現代日本（世界）は、新型コロナウイルスによる「コロナ禍」にある。あたかも新型コロナウイルスへの感染が「悪」であるかのように考えられ、新型コロナウイルス感染者から自殺者まで出ている。新型コロナウイルス感染者を封じ込めたい国と、営業活動や余暇活動等を行いたい国民の願望との間に、ある種の「対立図式」があるようにも思わ

れる。

幕末における、西欧列強（上）からの圧力と、その圧力下で生きる日本人。

現代における、国（上）からの感染抑制のための圧力と、その圧力下で生きる日本国民及び在日外国人ら。

圧力下にある私たちは、いつ、だれが、隔離、強制入院等といった「処罰」の対象になるかさえも分からない、不安定な社会を生きている。

圧力下に生きる私たちにとって、今、まさに必要な思想、あるいは考えとは何であろうか。新型コロナウイルス感染＝悪＝差別や隔離、という単純な差別図式さえ描けてしまいそうな現代社会において、私は問題提起をしたい。もしも、新型コロナウイルス感染＝悪＝差別という図式が描けてしまうのであれば、新型コロナウイルス感染を女性に置き換えて、女性＝（男性から見て）異質な存在⇒差別や、障がい者に置き換えて、障がい者＝（健常者から見て）少数派（マイノリティ）⇒差別等という乱暴な「因果関係」まで描けてしまいそうである。

上記のような、「差別の構図」を推し進めていくと、差別の連鎖が起こり、差別し合う人間関係、差別し合う社会構造に陥ってしまうと、堀（2011）は鋭い指摘を行っている。

それでは、差別の連鎖から脱却するためにミクロレベルで私たちにできることとは何なのであろうか。差別の助長を個々の努力で食い止めて行き、ミクロからメゾ、マクロへと、すなわち広義の社会保障・社会福祉を実現するために私たちができるとは何なのか。

堀（同上）は、「利己的な遺伝子」に対抗する概念として「共生する遺伝子」説を唱えることで、「差別の構図」からの脱却のための、理論的視座を与えようとしている。

筆者は「共生する遺伝子」説に影響を受けつつも、以下に取り上げる人物の思想やいきざまを参考に、「差別の構図」から脱却するための概念的・実践的な装置として「愛」を取り上げて考察を進めていきたい。

## 2. 目的

コロナ禍にある現代日本社会において、新型コロ

ナウイルス感染ばかりを特別視することや差別、偏見についてのアンチ・テーゼをすること。差別や偏見については新型コロナウイルス感染ばかりでなく、人種差別、部落差別、女性差別、障がい者差別等、いろいろあるが、それら諸々の差別意識等≡特別視することへの反論証を試みること。

## 3. 方法

思索的探求を行う。その際、吉田松陰、三浦綾子の思想と実践（いきざま）を参考に参考にする。

吉田松陰は幕末の明治維新时期直前に処刑された人物であり、三浦綾子は昭和期を生きた小説家である。吉田松陰についての概略は、中島（2020）を参照されたい。その対比する人物として三浦綾子を取り上げたのは、吉田松陰同様、三浦綾子が言行一致の人物であったからである。三浦綾子はキリスト者であったのだが、その信仰を形だけのものとせず、実践しようとするいきざまは数々のエッセー等から伺い知ることができる。

## 4. 私たち自身を知る

吉田松陰と三浦綾子の「愛」の思想と実践を探究する前に、私たち人間の持っている傾向（「性向」）について取り上げることとしたい。西洋哲学の祖であるソクラテスらはデルフォイの神託から「汝自身を知れ」との格言をもたらされたことは周知の通りである。思索的な探求を行う上で、まず私たちが自分自身を知ることから始めることが、思索の土台となると考える。

### 4.1. 自己中心性とは何か

吉野（1982）は、天動説と地動説を例にとって次のように述べている。

「子供のうちは、どんな人でも、地動説ではなく、天動説のような考え方をしている。子供の知識を観察して見たまえ。みんな、自分を中心としてまとめあげられている。電車通りは、うちの門から左へいったところ、ポストは右の方へいったところであって、（中略）

それが、大人になると、多かれ少なかれ、地動説のような考え方になって来る。広い世間というものを先にして、その上で、いろいろなものごとや、人

を理解してゆくんだ。場所も、もう何県何町といえ、自分のうちから見当をつけなくてもわかるし、人も、何々銀行の頭取だとか、何々中学校の校長さんだとかいえば、それでお互いがわかるようになっている。

しかし、大人になるとこういう考え方をするとするのは、実は、ごく大体のことに過ぎないんだ。人間がとかく自分を中心として、ものごとを考えたり、判断するという性質は、大人の間にもまだまだ根深く残っている。いや、君が大人になるとわかるけれど、こういう自分中心の考え方を抜け切っているという人は、広い世の中にも、実にまれなのだ」(25-26頁 下線筆者)。

また、徳富(2015)は格式高い文章で、以下のよう

に述べている。「いかなる場合にも「自己」は、人類運動力の中心点たり、ある者は最初に「自己」をもって運動の発足点となし、ある者は最後に「自己」をもって到着点となす」(206-207頁)。

後に詳しく取り上げるが、三浦(1982)は旧約聖書を引き合いに出しながら、私たち人間には自分自身を図る物差しと、他者を図る物差しがあり、それらの物差しは尺度が異なるということを著している。すなわち、自分自身を図る物差し(尺度)は鷹揚であるのに対して他者を図る物差し(尺度)は厳しいものとなりがちだというのである。

人間の自己中心性を題材とした、哲学や文学、あるいは絵画などの芸術については数え上げれば際限がない。もちろん、筆者自身も含めて、私たちは自己中心的であるという意味で、ある種の「業」を抱えているのかもしれない。

#### 4.2. 差別すること・偏見を持つこと

上記のように、私たち人間にとっては自己中心性から脱却することは容易なことではない。三浦(同上)の言うように、自分自身を図る物差しと他者を図る物差しが異なっているのだから。

香山(2017)は「いじめ」や「差別」は似ている人、近い人にかえって起こりやすいと論じている。「いじめ」や「差別」をしている人たちは、言わばある種の醜態状態にあり、「いじめ」や「差別」をしていることを「否認」する傾向にあると言う。また、

「いじめ」や「差別」をしている人たちには「攻撃性」も高まっていると精神医学的に分析している。

しかし、自己中心性という意味での「業」を抱えている人間社会の中では、「いじめ」や「差別」、「偏見」がなくなることはないだろう。堀(2013)も述べている。「差別も偏見もない人間関係などは永遠のテーマである」(253頁)。そのうえで堀は続けて言う。「しかし私が問い続けるのは、社会が「人」を障害化する社会である。もちろん社会が人を不安と苦痛と困難から完全に解放するとは考えていない。その上でも私は学生に社会を問い続けてほしいと思う」(同上)。

堀が述べているように、「いじめ」や「差別」、「偏見」をなくすことは「永遠のテーマ」である。だからと言って、簡単にできないとあきらめてしまってよいものでもない、筆者は考える。教育や福祉に従事する者として、「いじめ」「差別」「偏見」といった社会的な不平等を是正するように努め、個々人の「生きづらさ」の解消に尽力することは私たちに課せられた社会的課題のひとつであると考えからである。いみじくも、フーコー(1997)は特に精神疾患に関連して、(精神的な)病は「社会的なテーマを投影したものである」(122頁)と論じている。ここで言う「社会的なテーマ」とは現在で言う統合失調症を差別してきた歴史的経緯を踏まえたうえでの障がい者差別、あるいは日本に限定すればハンセン氏病罹患者の隔離、差別等を指していると考えられる。すなわち、社会的に解決していく必要のある課題であるという意味である。

これら社会的課題への解決をマクロレベルではなく、ミクロレベル、一人称の人(「私」)として「いじめ」や「差別」、「偏見」からの脱却を図った人物として、以下に吉田松陰と、三浦綾子を取り上げたい。吉田松陰と三浦綾子を、一人称の人として自己中心性からの脱却を図った人物らであると捉え、自分自身が変わることで他者にも影響を及ぼし、そして遂には社会をも動かした人物らであると、筆者は考えている。社会福祉の中には「ソーシャル・アクション」という言葉があるが、「ソーシャル・アクション」すなわち社会変革のためには、まずは一人称の人(「私」)が変わることが肝要なのではないかということは、筆者の考えの中の一つである。

## 5. 愛の実践者たち

本章では、自己中心性からの脱却を図った人物として、吉田松陰と、三浦綾子を取り上げるが、本論に入る前に、「愛」とは何かを簡単に論じたい。

曾野 (1995) は愛は惜しみなく奪うこともあると論じているが、本稿で取り上げる愛の概念は、相手から「何をもらえるか」「何をしてもらえるか」と期待するような類のものではない。そうではなく、岸見 (2018) を参照すると、「愛」とは、相手の幸福を願うものであり、まさに自己中心性からの脱却である。また、「愛」とは与えるものでもある。「愛」は相手の関心に関心を持つことであり、過去を手放すことでもある、過去にこだわらないことでもあると言及している。

ここでは、岸見の言う「愛」の中でも、自己中心性からの脱却という意味において愛を捉え、吉田松陰の場合と、三浦綾子の場合について、論じていきたい。

### 5.1. 吉田松陰の場合

吉田松陰の思想の中でも核心となる思想は、「孟子」であり、かつまた、日本が神州の皇国であるという思想である。特に日本が神州の皇国であるという考えは、実父の杉百合之助の教育によるものであることは、まず間違いない (徳富 2015)。徳富は同様に、吉田松陰は考えついたことを直ぐに実行する人であると評しており、「革命家」とまで言及している。

では、吉田松陰には、自己中心的な面はなかったのだろうか。

多くの資料 (例えば、椎名 (2015)) が記しているように、吉田松陰が二度目の野山獄に収監され、倒幕論を主張していたのに対し、久坂玄瑞や高杉晋作が倒幕について慎重論になっていたとき、吉田松陰は久坂らを絶交し、絶食の拳に出してしまうのである。両親や叔父、また母等に諫められて絶食は中止する。ハンガーストライキを起こしてしまうところなど、儒教の「考」を重視している吉田松陰にとっては自己中心的な行動に出たということは否めない (論述ではないが、松原 (2017) は物語の形をとって、絶食のこと等を具体的に著している)。

しかし、中島 (2020) でも論じたが、吉田松陰は当時の日本社会にあって、被差別民をも差別しなかった。椎名 (2015) は、その理由として吉田松陰の実弟の、杉敏三郎の存在と、女囚高須久子の存在を挙げている。耳が不自由だった杉敏三郎の存在が、吉田松陰の弱者への目線を涵養し、女囚高須久子との出会いが被差別民への目線を目覚めさせ、吉田松陰の思想の根底となる平等主義、さらには人間解放思想の根幹ともなり、四民平等思想、そして「草莽崛起」へと至るのだと考察している。また、「自由」という概念のなかった当時の日本において、吉田松陰が「自由」に相当するオランダ語を用いていることも、椎名 (同上) は明らかにしている。

吉野の言葉を借りれば天動説から地動説へのコペルニクス的転換が生じるのである。すなわち、自己中心性からの脱却である。その後の吉田松陰が安政の大獄で処刑され、吉田松陰の遺志を継いだ久坂玄瑞や高杉晋作らが明治維新の立役者となっていくのであるが、それは吉田松陰が自己中心性から脱却し、「神州皇国、日本」のために命を捨てたからこそだったのかもしれない。

蛇足になるが、処刑された吉田松陰の遺骸を葬ったものの中に、山尾庸三もおり、山尾は後の樂善會訓盲員の会長となるが、久田 (2009) が山尾庸三については詳論している。

### 5.2. 三浦綾子の場合

三浦綾子は戦時下は小学校教師であった (三浦 1969)。その後、脊椎カリエスや肺結核を患う。吉田松陰との違いは、三浦自身が当時の過酷な闘病生活等をエッセーに詳しく書いていることである。後に三浦は洗礼を受け、キリスト信者となるのだが、小学校教師のときに子どもたちに戦争に行くように教育したことや、また、重婚の罪を犯してしまいそうになったこと等を回想している。キリスト者である三浦の「罪」意識は、とてもこの論文では書き切れるものではないのだが、戦時下の教育や重婚の罪等に、三浦の自己中心性があったと述懐している (同上)。

三浦の思想はもちろんキリストの教えに根づいており、著作の中で、現世利益を求める人に対して神の存在をあまりにもなめているのではないかと述べ

ている(2018)。三浦にとっての神は「愛」であり、信心すれば病気が治るとか、信心すればお金持ちになれるとかいうような、人間にとって都合のよい神ではないということだけは確かである。

三浦は、前川正等のキリスト信者によってキリストの神への信心を持ち始めたことも本人が明らかにしているが、三浦に生きる勇気をもたらしている読者は少なくないのではないかと推察する。また、三浦は「義務」を「ただしいつとめ」であると述べ、三浦自身が死ぬことさえも義務＝ただしいつとめであると述べているところは特に注目される。三浦は自身の死をも、ある種の勤め、仕事であると述べているのであり、ここにこそ、三浦が自己中心性から脱却したことがうかがえると筆者は考える。「一人称の死」すなわち、「私」もいつかは死ぬ存在だということに関して、同じキリスト教徒でも、例えばトルストイ(1993)は「イワンイリツチの死」において、そこに「死」はなかったと述べているが、三浦は飽くまでも「一人称の死」を否定せず、すべての人間の、重要な仕事であると認識していたことは、いくら強調してもしすぎることはないように考えられる。

参考までに、吉田松陰と三浦綾子の比較を表1にまとめた。

## 6. 愛の実践を、どのようにして教育・福祉実践に生かすのか。

翻って、現代日本。日本に限らないこととは思われるが、コロナ禍で、医療職、看護職、介護職、ヘルパー等の「エッセンシャルワーカー」が「社会」から蔑視され、大量退職する病院や施設も存在するという事態に陥っている。これらエッセンシャルワーカーの家族からの反対で、退職する人も存在している。

しかし、神谷(2013)は、看護学生への講演の中で「看護に約束される生きがい」と題して、次のよ

うに述べている。「皆さんは看護婦さん(ママ)という、他人からもっとも“必要とされる”職業を選びました。この仕事はけっして楽なものではないし、(中略)けれども、多くの困難や努力を代償にしても惜しくないだけの生きがいがある、皆さんの行くてには約束されています。お金や暇をもてあましている人たちの“生きがい喪失”状態や“生きがいノイローゼ”に皆さんはかからないですむことでしょう。(中略)それには、まず他人から生きがいを与えられるのを待つのではなく、自分から他人に生きがいを与えることが必要でしょう」(25-26頁)

与えられる人ではなく、与える人へ。

ここにも筆者なりの表現を用いれば、自己中心性からの脱却であり、天動説から地動説への転換であり、そしてコペルニクス的転換があるのである。

私たち、教育職、または福祉職自身こそが、「愛」の実践者となり、自己中心性から脱却し、そして「与える人へ」と、少しずつ、変化していくことが求められていると考える。

なお、ここで論じている「与える」ということは、決して施しを「与える」という意味ではない。むしろ、Riessman(1965)が論じているような、「与える者」が最も「受ける」という意味である。彼はさらに論を進めて述べる。

「援助の「受け手」を援助の「与え手」へと変えていく方法を見つけること、このようにして彼らの役割を変換し、そして状況を構築することで、援助の受け手は支援を与えることを願い求める役割に取って代わることができるのである」(拙訳 原文28頁より)

本稿では詳しく論じることができないが、「与える」ということは決して施し等ではなく、教育職、福祉職の方が学生、利用者らから何かを「受ける」ことであり、学生、利用者らが「与え手」となるといったパラドックスがあるのである。そして、また、

表1. 吉田松陰、三浦綾子の根本思想、愛(信仰の)対象、自己中心性

### 愛の実践者たち —自己中心性からの脱却

人物/核心となる思想等	根本思想	愛の対象	自己中心性
吉田松陰	日本人は神州、皇国の臣である	神州皇国	絶食(ハンスト)
三浦綾子	愛としての神概念	聖書の神	戦時下の教育、重婚

教育職、福祉職が学生や利用者らに何かを「与え」、それに呼応するように学生、利用者らが教育職、福祉職に何かを「与える」というような呼応関係にあるとすることができるのである。

## 7. 終わりに — 特別視しない

最後に、三浦綾子のがんになったときの文章を要約して記したい。

三浦のがんになった頃は、がん＝死に至る病であり、人々から恐れられ、忌避されていた病だった。

しかし、三浦は述べる。人の死因はがんだけではない。交通事故死もあれば、心臓発作等もあり、人の死因を数え上げればキリがない。だから、三浦は自身ががんだからと言って、特別だとは思いたくないと(2018)。

三浦は故人となっているが、現代日本のコロナ禍を三浦が見たら何と言うだろうか。

新型コロナウイルスだけが、果たして特別な病なのであろうか。

また、一人称の人(「私」)自身でさえも、特別な存在ではないのである。ここにこそ、三浦綾子のいきざまがあるように思われるのである。そして、吉田松陰のいきざまに関しても、「自分だけが」等という考えをしてはならないと『講孟余話』で述べていることは中島(2020)でも論じた通りである。

## 8. 今後の課題

本論文において、自己中心性からの脱却をテーマに、「愛」や「与える」ことについて論じた。今後は「愛」や「与える」ということは、歴史的にどのように考察されてきたのか、また実践されてきたのかについて深く探求することが必要であると考え。

教育職、福祉職が「与える」ということを実践し

ていくために。

## 引用文献

- フーコー, M (1997) 中山元訳『精神疾患とパーソナリティ』筑摩書房。  
堀利和 (2013)『はじめての障害者問題 — 社会が変われば「障害」も変わる』現代書館。  
神谷美恵子 (2013)『ケアへのまなざし』みすず書房。  
Riessman, Frank (1965) *The "Helper" Therapy Principle. Social Work, Volume 10, Issue 2, 1 April 1965 (27-32)*。  
徳富蘇峰 (2015)『将来の日本 吉田松陰』中央公論新社。  
吉野源三郎 (1982)『君たちはどう生きるか』岩波書店。

## 参考文献

- 久田信行 (2009)「盲啞学校の成立と山尾庸三 — 吉田松陰の思想と時代背景 —」『群馬大学教育実践研究 第26号』(89-100)。  
堀利和 (2011)『共生社会論 — 障がい者が解く「共生の遺伝子」説 —』現代書館。  
香山リカ (2017)『「いじめ」や「差別」をなくすためにできること』筑摩書房。  
岸見一郎 (2018)『愛とためらいの哲学』PHP研究所。  
松原誠 (2017)『いかで忘れん — 久子と松陰』新人物往来社。  
三浦綾子 (1969)『道ありき — 青春編 —』主婦の友社。  
三浦綾子 (1982)『光あるうちに — 道ありき (三) 信仰入門編 —』新潮社。  
三浦綾子 (2018)『一日の苦労は、その日だけで十分です』小学館。  
中島広明 (2020)「日本における女性の自立の源泉 — 吉田松陰の女子教育観 —」『敬心・研究ジャーナル 第4巻 第2号』(75-81)。  
椎名慎太郎 (2015)「学習者の跡を追って — 吉田松陰の獄中での学び —」『大学改革と生涯学習：山梨学院生涯学習センター紀要 第19巻』(5-23)。  
曾野綾子 (1995)『誰のために愛するか』文藝春秋。  
トルストイ, レフ. N『イワン・イリッチの死』岩波書店。  
海原徹・海原幸子 (2006)『エピソードでつづる吉田松陰』ミネルヴァ書房。

受付日：2021年5月2日